

都市の生活と幼児の保育 (母と子の姿)

—一九六九年を迎えて—

桜井たか子



都市の生活と改まって題をつけると、どのように特徴つけてよいか考えてしまうが、私たちの園のある地域のようすを一通り見直してそこから問題を発見することにした。

千代田区神田小川町というところにあるその街なみは、東から西へ^{やぐら}踏国通りが走り、その両側に奇数番地、偶数番地がある。

国電のお茶の水駅から南へ七分位歩いたあたりである。

森の石松という浪花ぶしに、「神田っ子だつてねエ、すし食いねエ」という有名なせりふがあるので「神田」は「かんだ」という呼びかたをすべての方がご存じだと思っていたら、「千代田区かみたですか」ときかれたことがあって、外国人にでも教えるような気分で、「かんだとよみます」と答えた。

何でも、むかし富士山が活火山として活動していた頃の灰が降

って地下にかたまっているのだそうで、江戸幕府の繁栄、明治維新、関東大震災、戦災と、幾多の変化をくりかえして、長い年月に培われた文化のあるところといえる。

私たちは旅行をすると、その土地の名所・古蹟をす暇を惜しんでまわるが、自分たちの身近な場所で、案内見落としているところが多い。

ここには伝統的に教育の背景となるものがあつた。駿河台も北に連なる学区域である。この駿河台に大学が入りまじつて存在している。質実をもって聞えたC大が一番近い。病院にはよくお世話になるN大、先年来的さわぎのトップをきつたM大。これらの大学が熱病にとりつかれたように急に騒然としてきて、学生たちが勉学につかう机、椅子(数人がけのベンチ)——粗末な——をバ

リケードとして積み重ねることがはあった。

おもえば、この学生たちは生まれるとすぐからベビーブームで、十分積み木あそびができなかったのである。

こういうことはすぐにまねるのが子どもたちである。四歳児のクラスの入口の中側に、中型箱積木をたくさんつかって、バリケードがつくられた。きけば五歳児のふじぐみがくるのを防ぐためという。廊下側には何もないのでまのぬけたような愛嬌も感じられた。

このクラスには元気がよいというか、むこうみずがそろっていて、隣の四歳児のクラスとは対抗意識をもたず、一段上の五歳児に関心をみせ、あるいははりあうようすをみせている。

この中のひとりには、いつかC大のセクト争いの際、ヘルメット、ふくめんの学生たちの一触即発のにらめっこを「かっこいい！」と叫んだものである。

担任の教師は、さりげなく、帰る時間になったからかたづけましようといって、自分からとりのぞきはじめた。

大へんなどきこそ落ちつくことが肝要と思っているの、今こそと思うのだが、いきつくところまでいかないと秩序が回復しないのであろうか、何とも困ったことであった。

こんな情勢の中にも、「〇月に出産をひかえまして……」と若

いご夫婦は、次代を荷なうあとつぎを生み育てるのに張りきっている。

学生のほうが異常なので、正常はそこにあつて困難を排除しながらも力づくよく脈うっている。それはいま、母と子がむすびついている姿だ。

学生は、幼児から成長して、小学生、中学生、高校生となり、そして大学生になった。母と子は離れた。

いつまでも依存せよというのではない。然しながら子の悩みを肌で感じてやれる母の姿がないものであろうか。

母と子とつながっているべきものと、母を超えて伸びるものがあるに違いない。

子をもつ母は、いま誰が戦場にわが子を送ろうと思うだろうか。また、ついこのあいだまで学生であつたおとなたちも過激な手段は望まない。それなのに、学生たちは苦勞して育てた母から離れてしまっている。

一九六九という年は一そう激しくゆれる年になろうといわれている。

母と子のつながりをもつ幼児の時代は、一生の中で一番大切な時期だ。園としては今までにもまして、母と子のつながりにおいて、根をおろそうとした保育をしていこうと思う。

日曜日には静まりかえる土地であるが、平日は目ぬき通りはもちろん、横丁にも溢れる車・車、救急車のサイレンには慢性になってしまふ感覚、このようにかくと、いかにもさつばつで、暮すのが厭になってしまふようであるが、適度に開放性があつて、衛生に気をくばり、文化的にも高い水準を維持し、伝統の中に近代的な生活ができることは多分に魅力的であるといえよう。

だからこの土地に何年か住んで、ビルなどの建築のため郊外に住居だけうつしかえた人たちも、このつながりをたちきりたくないの、乗物で通園することが多い。

あながち越境がわるいともいえない。

両親が神田っ子もいるし、どちらかが地方出身という例もある。ニコライ堂、神田明神は信仰のあつい屈指の存在であり、超然とした風格がある。

古くから土地に住むひとと、勤めの都合で転入したひとがあつて、幼稚園に、それぞれの子どもをいれたことによつて知りあいになることもある。

この街になれていない母の不安は、子どもにも影響する。母親がその街に安定感をもつていて子どもを幼稚園に入れるのと、ひっこしたてで入れるのとは保育者も気のくばりようがちがう。さいわい、前から住む人は、あとから住むひとを容易になじませ

てくれる。

家庭調査表などでも一通りのことはわかるが、実際に住んでいるところをおとずれると、どういう立場であるかよくわかる。

勤勉で、しかも遊びも心得ていてよい意味で実力がある。若い夫婦だけでなく、三代がそろっていることが多い。

学校との関係も三代目になるのがみられる。気ほねのおれることもあろうが協調する精神ももちあわせている。

交通がはげしくなつて、ろじ裏にも車が入りし、幼児のあそび場がない。そういうわけで三歳児の保育も考えられて当然である。空気の汚れなども解決策をよりよい方向にもつていくよう努力している。

園には五クラスがあり、三歳児・十八名、四歳児・二十三名ずつ二クラス、五歳児・三十四名及び二十二名の二クラス（保育室の広さによる）で担任のない主任を加えて、計六名の教師が兼任園長のもとで百二十名の幼児を保育している。

既に普及の段階は通りこして、ひとりひとりを可能なかぎりきめこまかに指導ができることはうれしい。油断をして後退することのないよう気をつけたい。

地域のレベルと幼稚園のレベルがよくバランスがとれていて、例えば、警察関係にしても、交通指導には力を惜しまず努力して

いただいている。

もし何か私たちの指導上の悩みなどがあれば区の教育センターに相談室があり、経験豊かな先生方が手をさしのべてくれるし、諸外国からの参観者が訪問されることを通しては、のびのびとして、おおむね好ましい状態と認めてもらえるので、ひとりよがりにならないで国際的に肩をならべていけることが期待される。

園の前の本屋さんに浦和から通勤しているという方が、雨上りにかたつむりをどっさりもってきてくださったこともある。

園で卵からかえった分もあるから、分けあって子どもたちが楽しんで。

兎やモルモットを飼うにしても、お米やさんがさんだらをどっついておいて届けてくださる。病気になるれば、東大畜病院で研究的に治療をしてくださる。余談になるが、「兎のいない幼稚園が幼稚園といえるだろうか」という説に対し「兎と幼稚園とは何の関係もない」といわれるのをきいたことがある。たしかに、兎さえ飼っていれば、それでよいというものでもないし、兎なんかいないというのも極端であろう。飼えれば飼ったにこしたことはないし、飼えないからといって絶望することもあるまい。

通園に、おくりむかえを原則としていて、母の手をかりることになるが、店などをもつ忙がしい母も、この時に子どもとのふれ

あいがあり、有効に生かしてもらっている。

ガードレールの設置、信号の増設と、心配事がひとつひとつ解決していくこの頃、胸をふさぐのはやはり学生のことである。

学園の中だけでおさまらない学生の騒動は、たみ三畳ほどもある赤や、黒やの旗をおしたて、街のあちらこちらに出て行く。あるいは道路一ぱいに角材を手にしてすわりこむ。

爆発させるのは、新宿でも、その出発地点はわが誇りたかき駿河台なのである。この学生たちをみて、私は保育者である立場を忘れて、「その棒をかきなさい」といいたくなる。(ふりまわしているときはあぶなくて近よれないが)私のあいては幼児だけなのに。それとも、ひとにわかるように話ができないのは幼児以下かもしれない。

「夕鶴」のつうが、俗なはなしをする手ひょうの声がきこえなくなるという所がある。コミュニケーションとは、きこうとする間にしか通じないものだろうか。

街の母もきつと思いは同じであろう。そしてそのすわりこんだ学生の母がそれを見ているのである。それとも、一番胸をいためているのが、見ていない学生の母であるかも知れない。

一九六九年がよい年であってほしいと切に希っている。

(千代田区立小川幼稚園)